



わたしの研究 ④7

テーマ

私のこれまでとこれから

藤塚 千秋



1. はじめに

前回の「わたしの研究④6」で執筆された栗原先生と同じく、本学に赴任して2年目（大学教員としては6年目）となりました。私は、社会福祉学部 ライフ・ウェルネス学科に所属し、主に中学校・高等学校の保健体育教員養成に携わっています。また、教養科目として開講されている健康科学（実技）も担当しており、本学学生の健康づくりのお手伝いをさせていただいています。

まずは、そのような自己紹介も兼ねて私の経歴から少しお話させていただきたいと思います。

2. 私を大きく変えた学生生活

私は幼い頃から運動・スポーツが大好きで、運動会やマラソン大会の季節になると心躍らせ、その日を楽しみにして指折り数えるような子どもでした。そんな経験から、将来は運動・スポーツの魅力を伝えられる保健体育の先生になりたいと考え、教員養成系の大学を希望していましたが、（両親から県外に出ることを賛成してもらえなかったという）安易な理由で、地元で中高の保健体育の教員免許状が取得できる私立大学に進学しました。

母校は医療福祉系の総合大学でしたが、その中の健康体育学科で学んだ4年間は、今日の私の教員生活を支える大きな財産となりました。同期生60数名のうち、教員を志している仲間は数名ととても少なく、スポーツインストラク

ターやトレーナーとなり、病院などの医療機関や健康増進施設で働くことを希望する仲間が多くを占めていました。

健康学、体育学、医学に関する専門的知識や技術を理論的、実践的に学ぶという学科の教育方針はもとより、健康や運動・スポーツを科学的な観点から学びたいという仲間たちとの学習はとても刺激的で、漠然と「教員＝教育学部」と考えていた私の視野を大きく広げてくれるものでした。そして、すばらしい恩師との出会いもあり、「健康」「体育」「教育」をもっとここで深く学びたいという気持ちが高じて、大学院修士・博士課程と併せて9年間を同じ母校で過ごすこととなります。

3. 現場に還元できる研究を目指して

学部・大学院では、健康体育教育学研究室に所属していました。高等学校の保健体育教諭として長年現場を経験されてきた恩師は、言葉にこそされませんが「研究は現場に還元できるものを」という視点でいつも研究に取り組んでいらっしゃいます。私も大学院に進学はしましたが、ゆくゆくはやはり現場で働くものと考えていましたので、自分の将来に少しでも役立つことがしたいと思い、小中高高校生や大学生の生活習慣をテーマにした研究を行いました。子どもたちの生活習慣を改善し、健康的な生活を送るようになるためにはどのようなアプローチを行えばよいのか、また、現場でも活用できる教材の開発と介入研究を行うことが主な活動でした。

結局、保健体育教諭として現場で働く夢かなわぬ間に大学教員となりましたが、大学院時代には定時制高校の非常勤講師として4年間勤めさせていただきました。ここでの経験は、私の研究生活に大きな影響を与え、当時だけでなく今でも「現場で生きる研究」について考えるための原動力となっていると思います。

4. 子どもたちが抱える健康課題と教科「保健体育」のかかわり

現代の子どもたちは、心の健康、体力低下、学力低下など、多くの問題を抱えています。近年ではこれらの問題と生活習慣には関連があるといわれており、学校や家庭では児童・生徒・学生が健康的に過ごす生活習慣を考えた教育課程や家庭での生活が望まれるところです。その中で、教科「保健体育」においても健康の基礎となる生活習慣について適切な方向性を見据えて取り組んでいかなければならないと考えます。

しかし、もともと「保健」と「体育」はまったく別の内容であるものとして進められ、いわゆる「保健・体育」として今日に至っていることが、前述した考え方の浸透を妨げているのではないかと感じます。それは、保健体育教諭を養成する大学で保健体育科教育法の授業が「体育科教育法」と「保健科教育法」に分かれ、それぞれ専門の教員が担当していることも要因として考えられると思います。また、保健体育教員はどちらかという保健の授業に苦手意識を持っていたり、「雨降り保健（雨が降って体育ができないから保健の授業をする）」といわれるように、「保健」そのものが軽んじられたりする実態からもうかがい知ることができます。

子どもたちの健康課題を解決していくためには、「保健」と「体育」特に体育の運動領域と保健の単元を関連付け、融合させるような「保健体育」の考え方が今後もより重要になってくると思います。学部・大学院時代には、講義や実習、ゼミでの研究などを通じ、多くの場面でその学びを深めることができました。

そして今、私は本学ライフ・ウェルネス学科において、保健体育科教育法（4科目）を一人で担当させていただいています。将来教育現場で活躍するであろう学生の皆さんにも、子どもたちの健康増進を担う一員として広い視野を

もった保健体育教員を志すことを伝えていきたいと、奮闘・試行錯誤の毎日を送っているところです。

5. 新たな挑戦

－社会福祉学部で学ぶことの意義

先にも述べましたように、本学ライフ・ウェルネス学科は社会福祉学部の中の学科として位置付けられています。前任校は、私の母校と同じような学科でしたので、（語弊があるかもしれませんが）「同じ釜の飯を食う」ような感覚で授業づくりや研究活動ができていたように思います。しかし、本学に赴任するにあたって、または赴任して、社会福祉学部の中にある本学科で学ぶことの意義を考えるようになりました。

今の学校現場に求められている能力・スキルは、本当に多岐にわたっています。近年では発達障害をもつ児童・生徒が増加し、学習や生活の面で特別な教育的支援が必要とされ、適切な指導及び支援を行うことが喫緊の教育課題となっています。また、いじめや不登校、家庭の経済的格差による貧困など、子どもたちを取り巻いている社会的背景を正しく理解し、安心・安全な学校生活を送ることができるようなサポートも求められています。

本学社会福祉学部は、そういった課題について考え、一人ひとりの幸せな人生（ウェルビーイング）の実現を支える専門職を養成する学部です。熊本県の福祉は、本学卒業生の方々が切り開いてこられたともお聞きしました。今後は、その卒業生を育てた社会福祉の専門家である多くの先生方にご教授をいただきながら、福祉の視点をもった保健体育教員の養成、そして自らの新たな研究活動にも挑戦していきたいと考えています。

（本研究所研究員 保健体育科教育学）